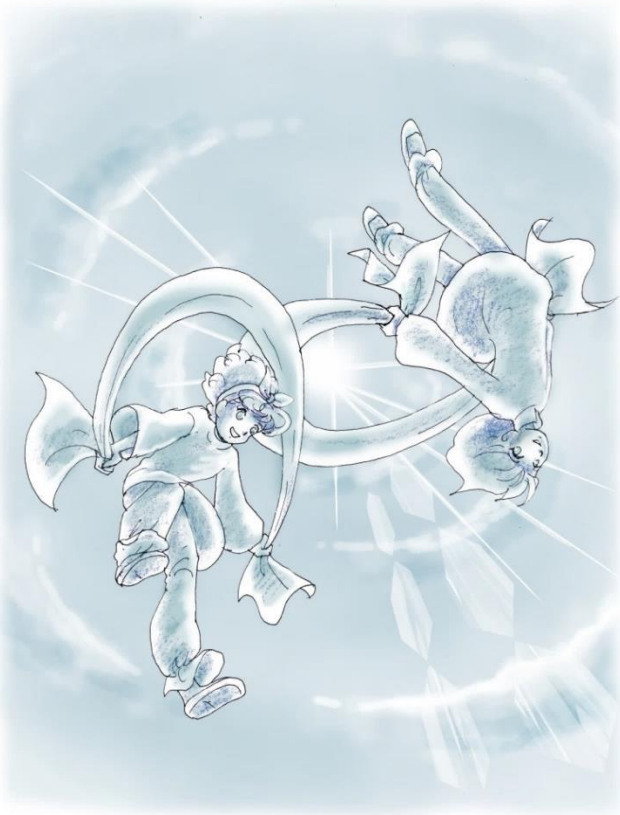
風の末裔シリーズ・2nd シーズンの9

～ここだけの花～



かっての王都を眼下に、風の末裔の一番目の長が、夏草色の馬を駆る。
モンゴルの大王没後、何人かのハーンが代替わりしたが、偉大なる始祖には遠く及ばない。帝国にかつての隆盛はない。
ここまで低い所を飛んだのは、国土が荒れても変わらない白い森を見て、ちょっと干渉に浸ってみたかっただけだ。あの森には、若い日の煌(きら)めくような想い出がある。あの日の四人のうち、…二人の笑顔は、もう見られない…。

濃い縁取りの目の妖精は、気持ちを切り替えて上昇気流に乗った。この上昇力を持つのは、里ではこの馬だけだ。
ジェット気流を捉えて、通い慣れた道を辿る。程なく、西南の風出流山(かぜいずるやま)に到着する。
山頂を見ながら高度を下げて、中腹の氷の神殿の前に降り立つ。普通の草の馬は、この高度でも空気が薄くて、飛ぶ事すら出来ない。
神殿は、昔は魔のモノの巣窟だった。今は、そういうのはすっかり一掃し、過去人が施した呪いや術も解除されている。最奥の広間が分厚い氷漬けになっているだけだ。
入り口の階段を降りて来る人影。

空色の髪を長く編んだ、薄色の女性。はなだ色の瞳に孤高の表情。ホント、初めて逢った時と変わらない。
いや、変わった所はある。背中に半透明の四枚の羽根。外側にゆったりした白の羽根。内側に少し小さい銀の羽根。
四枚の羽根をさやさやと揺らしながら、女性は柔らかく微笑んで近付いて来た。
「長……来られる頃かと思っておりました」
「約束の日だからね。二人は何処?」
その時、天空を笑い声が覆った。
「あはははは……」
「きゃはは……」
あどけない小鳥のような笑い声。
青空に雲が渦巻く日輪の中、二つの光が煌めき、程なく人影となる。二人の子供が木の葉のようにくるくる回りながら、空から降って来た。
まだ空飛ぶ草の馬に乗れる歳でもないというのに、子供達は手に持つ絹の帯に風を集め、山間の上昇気流を見事に捉えて、空を舞っているのだ。
女性が声を上げる。
「早く降りていらっしゃい。お父様がお見えよ」

二人の子供は軽やかに雪原に着地する。
「お父様、お久し振りです」
目の縁が凛々しい、空色の真っ直ぐな髪の男の子。
「ね、ね、アオのサトへ行ったら、お馬が貰えるんでしょう？アタシ、直ぐに欲しい！」
はなだ色の瞳、空色の巻き髪の女の子。
「直ぐには無理だな、ユユ。しっかり勉強を頑張ってからだ」
父親は、小さい娘を肩車しながら言う。
「ぶ～～」
「里へ行ったら、そんなワガママ通りませんよ。それにお父様の事は、長様と呼ぶんですよ」
「ぶ～～変なの～～！」
女の子は肩車から飛び降りて、神殿へ駆け込んで行った。
「あいつ、荷造りもまだなんだ！」
兄は、双子なのに自分と違って落ち着きのない妹に、舌打ちした。
「そうか、手伝ってやってくれ、ナナ」
「僕が、何でっ？」
「妹は見捨てちゃダメだ」
「……」

男の子は不満気ながらも、妹の後を追って走って行った。
二人、雪原に佇む。
「君は、寂しくなるな」
「ここへ来た、最初の頃に戻るだけです」
「……」
「あの頃も、そんなに寂しくはありませんでした。貴方が隙間なく訪ねて来て下さったので」
「キビタキとの約束を果たしただけだよ…」

蒼の狼は、『生涯掛けて護った大切なヒト』の最後の一息まで側にいた。ほぼ大往生だったし、周囲も何だか肩を降ろした。
その頃の彼女には、愛する息子がまだいて、戦場を駆ける彼の側に、白い羽根のある姿で、ずっと寄り添っていた。
蒼の長との約束どおり草原の領主となった息子は、父の遺言も継いで、兄達と隣国への遠征を重ねていた。
しかし周囲の予想外に、息子は…キビタキは…人間の名はトルイだが…、王の死後、たった数年で逝ってしまった。草原で……。
キビタキは生前の口癖通り、母を護る存在となった。
四枚の羽根を背負った狼は、その頃の蒼の長…兄の言葉や、

その弟子達の言葉を振り払い、この神殿に移った。
王や息子を思い出させる全てのモノと切れたかったのかもしれないし、そのまま独りで消えてしまいたかったのかもしれない……。
一番目の長は…その頃は弟子の一人だったが…ただ一人、その神殿に飛べる能力を持っていた。
神サマがこの時の為に自分に与えてくれた能力だと信じた。
大昔、白い森でしたキビタキとの約束通り、狼の寂しいのを『少しは減らす』為に、暇を捻り出しては神殿を訪ねた。
訪ねるっていっても、共通の話題が豊富な訳でもない。
秋の月の下で馬頭琴を鳴らしたり、吹雪の夜に暖炉の側でシャタル(モンゴル将棋)を指したり、時には春霞の雲海を二人で黙って眺めていたりした。
そんなのが七年続いた。
そして八年前…、長を襲名したのを期に、玉砕覚悟でプロポーズした。意外や、彼女は受けてくれた。
彼女が里へは降りず、この神殿で暮らし続ける…という条件付きで。変則的だが、長は承知した。
子供が出来たら就学年まではここで母と暮らす事…と言う条件は、長の方から出した。
ブツブツ文句を言うオタネお婆さんをここまで運んで、狼は珠のような双子を生み落とした。長の方の家系の名前、ナナとユユと呼んだ。
そして、今日、二人は初めて山を降り、蒼の里へ向かう。
「季節毎の長い休みには、必ず送り届けるから」
「修練所へ通い出したら、親元へ帰るよりも、友達と遊ぶ事を優先する子供になって欲しいわ」
「君、そんな子供だったの？」
「あら、貴方がそんな子供だったんじゃないんですか？　ツバクロ殿」
＊＊＊
子供達は、初めて乗るジェット気流に、大はしゃぎだった。見る景色全てにはしゃぎ過ぎ、里に着いた頃には、二人ともぐったりしていた。馬繋ぎ場には、今日の仕事をみんな引き受けてくれた古い相棒…二番目の長ノスリと、以前の長…大長が出迎えてくれた。
「おお、来たか、ガキんちょども、お前ら、俺を覚えているか？…っても、赤ん坊の時以来だからな。何にしても、うちで預かるんだから、お前らの親父そのニだ。宜しくな!!」

ノスリの大きな掌に頭をガシガシ撫でられて、双子は面喰らったが、もう一人は知った顔だったので、ホッとした。
「叔父上、ノスリ長様、お世話になります」
「叔父サマ！　アタシ、早くお馬が欲しい！」
可愛い双子に会いたい気持ちが勝って高空飛行を会得してしまった大長は、長を退いてからは、父親を差し置いてしょっちゅう神殿を訪れていたので、双子とも顔見知りだ。
叔父は、ニコニコして双子の肩に手を置いた。
妹の子供を里で迎える日が来るなんて、夢にも思わなかった。まったくツバクロの粘り強さと根性には、頭が下がる思いだ…。

一歩下がって、フィフィが控えている。
ああ、もう幼名のフィフィとは呼ばれていないんだが…、二つ団子にオレンジ毛糸の髪型は、一生変わらない。しゃがんで二人の子供に目線を合わせる。
「さ、疲れたでしょ。晩御飯の支度、出来ているわ。うちはお兄ちゃんお姉ちゃんが多くてびっくりするかもしれないけれど、賑やかなのも楽しいってすぐに分かるわよ。ノスリ、今日は早く帰れるの？」
「ああ、明日の打合せが済んだら帰るから、飯は一緒に食えるぞ」
「分かったわ。それと、小さい子供を預かるんだから、汚ない言葉使いはやめてね」
「へいへい」

大長と、ノスリとツバクロで、執務室で明日の打ち合わせを済ませる。
「ツバクロ、お前もうちで飯食ってくだろ？」
「いや、寄る所があるから」
「寄る所……ああ…」
ノスリも大長も、何か悟る。
「じゃ、奴に宜しく…」
ノスリは明るい大家族のパオへ、大長も静かな自宅へ帰って行った。
ツバクロは里の奥へ足を向ける。
人気(ひとけ)の少ない、部落外れの小さなパオ。昔の馬具置き場…もっと昔は、産屋だった所だ。
御簾の外から声を掛けると、どうぞと静かな返事がした。
ランタンに照らされてスッと立つ老婦人と、奥のベッドで眠る水色の髪の妖精。

「カワセミ、今日、僕の子供が里に降りて来たよ。僕と蒼の狼の子供」
水色のふっさりした睫毛が上がる事はない。
傍らの老婦人が言う。
「ご存知なようでしたよ。今朝から嬉しそうでした。早くお顔が見たいと」
この長い黒髪の婦人は、蒼の妖精とは違う…人間だ。三番目の長カワセミの依り代として、常に側に控える。
昔から変わらない青みがかった目をしばたかせて、ツバクロと傍らの眠れるヒトを交互に見る。
「そうか…、君に直接逢わせるのは、少し里に馴染んでからでいいか？　今はこれで」
ツバクロはベッドに近寄り、彼の細い手を握った。昔、必ず巻いていた石の鎖は…もうない。
集中して目を閉じ、頭の中で、空から降って来た愛しい我が子を映した。しばらくして、自分と同じように、子供達を慈しむ気持ちが伝わって来る。見てくれたようだ…。
「私も早くお逢いしとうございますわ」
「そうだね、カタカゴ、近い内に。じゃあおやすみ、カワセミおやすみ…」
オ・ヤ・ス・ミ……。
頭の中に響いた。今日は、体調が良いんだな……。
湖の巫女…カタカゴが、名前を貰って間もなくの…まだ少女だった頃。草原に起こったある出来事で、カワセミは残りの人生、起きて活動する力を全て使い切ってしまった。そしてあの場所で昏々と眠り続ける。
巫女は決心した。
意地もケジメもない。どんなに無理を通してもこのヒトの側にいると。自分にとって何が大切か、その時初めて自覚した。そして、人間の名前、…イルアルティを捨てた。
カワセミは、巫女にだけ、予知や透視を伝えた。
里の者は否応ない。初めて人間の住人を認める事となる。
湖の主殿には今の大長が話を付けに行った。大ナマズは意外とあっさり承諾してくれた。主もカタカゴが好きだった。彼女の気持ちを、誰よりも以前から知っていた。
以来、カタカゴは、カワセミの身の回りの一切をやりながら、彼の声として彼処にいる。
彼女自身の選んだ、彼女の『在るべき場所』。

ツバクロは執務室に戻った。カンテラに明かりを灯す。書類を引き寄せ、明日から訪ねる地方の下調べをする。長として蒼の里の外交官として、月の半分は国内外を飛び回る。

ノスリとフィフィは、そんなツバクロを見て、胸をトンと叩いてくれた。

「お父さんがほとんど家に帰らないんじゃ、子供達が心配だわ。いっそうちの子にしてしまわない？　二人っ位増えたって変わんないわよ」

「それでなくともお前は『通い婚』で大変なんだからな」

「ノスリ…君が言うと、何か卑猥に聞こえるからやめてくれ。でも有り難う、そうして貰えると助かる」

ずっと他人を知らず育った子供達が心配だったツバクロは、彼らの申し出は願ってもない事だった。

「通い婚、か……」

ツバクロは苦笑いする。

有翼人についての詳しい事は、前に大長に聞いた。狼は羽根のある自分の存在を、野に下った有翼人の末裔に交わらすべきではない…と思っているのかもしれない。

羽根を持つ資質を潜在的に持つ者は、意外といるかもしれないのだ。過去、有翼人達は、恐ろしい過ちを犯している。

「ただ、羽根は、あのヒトの誇り…、命だ」

ツバクロは溜め息を付いた。

「女性って、どいつもこいつも、何て、激しくて、強情で、強いんだ。狼といい…、巫女殿といい…、フィフィだってそうだよな…」

＊＊＊

「ユユったら、今日も居残り罰なんだ」

白い枝のワッカの掛かっているパオの入り口をくぐって、男の子が呆れた声で言いながら駆け込んで来た。

「まず、『ただいま帰りました』よ。ナナ」

十コ年上の『姉』が、したり顔でいさめる。

「それより今日は何を習ったの？　復習を見てあげるね」

「あら、ウガイが先よ。足の泥も落とさなくっちゃね」

「オヤツあるわよ。甘茶の方がいいかしら？」

たちまち数人の姉達に取り囲まれて、あれやこれやされる。

蒼の里へ来て二週間…。山の神殿で母と妹とほぼ三人で育ったナナは、この環境の変化に大いに戸惑っていた。子供って、どこでもこんなにチヤホヤされる物なのか？

勿論違う。

ノスリ家の年頃の娘達は、『あの』ツバクロ長様の子供を家

で預かると聞いて、色めき立って喜んだ。そう、ツバクロの『往年の流し目』は、時を経ても健在だった。
細君が里の外に在住なのもミステリアスだし、馬繋ぎ場から執務室へのメインストリートは、相変わらずの『オンナノコの視線総ざらい状態』だった。まあカタカゴに言わせれば『永遠の王子様現象』らしい。

しかしナナにはそんなの関係ない。修練所に入ったら、同年代の皆、大人っぽくて賢そうだ。山の神殿でのんびり暮らしていた分、自分だけ遅れているような気がした。
ユユは呑気に溶け込んでいるが、自分はグズグスしていられない。首席を取れなかったら、父様、叔父様の顔に泥を塗ってしまう。
ナナは妙なプレッシャーを抱え込んでいた。何だかいつも急いて、追い立てられる気分。
修練所をスキップ卒業して、一日も早く長の弟子になる事が目標なのに、ノスリ家の兄姉の何人かは既に弟子入りして、執務室で働いている。生まれたのが遅いんだから仕方がないのに、それを見て更に焦りを感じていた。

「ぼ、僕、勉強したいから、失礼します！」
そう言って、石板と書物を抱えて外へ飛び出した。
向かう先は里の奥…、南側の干草置き場の横の、少し広めの馬具置き場だ。里へ来た翌日、いなくなった妹を探して歩いていた時、たまたま見つけた。鞍と鞍の間が広くて、光が差し込んで明るい場所がある。
地べたに座って、鞍の上に石板を置けて、読み方書き方の勉強をするのに丁度いい。何度か馬具を取りに来た大人に見付かったが、イタズラしている風でなければ、特に追い出されなかった。
いつもの場所に座り込んで、石板を出して筆記具を持った所で、誰かが入って来た気配を感じた。見つかれば挨拶すればいい…位の気持ちで気にしなかったが、いきなり大声が降って来た。
「そ、そこで…！　何を…何を…!!」
金切り声の主は、細っこい老婦人だった。目を丸くしてびっくりする男の子に、動揺して大きく波打つ胸を撫で下ろした。
「あ、ああ、ごめんなさい、驚かせてしまって…」
「ううん、僕こそごめんなさい。でも、そんなに驚く？」
ナナは石板から顔を上げて、そのヒトをよく見た。

里へ来た翌日に会ったヒトだ。明るい所でよく見ると、妖精と様子が違う。
「ああ…いえ、私が怖がりなのよ。その筆記具が尖った錐（きり）に見えたの。弱虫でしょう」
婦人は目的の道具箱を手に取って笑った。ナナは子供の好奇心から素直に聞いた。
「貴方、蒼の妖精じゃないの？」
婦人は道具箱を脇に抱えて子供に向き直った。
「そうよ、人間なの。カタカゴっていいます。貴方はナナね」
ツバクロは不在が多くて、まだナナをカワセミに紹介出来ないでいた。
「はい、何で分かるの？」
「目がお父様とおんなじだわ。凛々しくて」
「……」
ここへ来て、何十回も言われた事なので、ナナはちょっとウンザリした。それよりこのヒトの事の方が気になる。
「蒼の里って、人間もいるんだ？」
「私、一人なの」
「ふうん、どうして人間なのに、蒼の里にいるの？」
「巫女なの。カワセミ長様の、依り代なのよ」
「すごいや！　さすが長様だね。人間の家来がいるなんて！」
巫女が目を丸くした所で、ノスリが入って来た。
「ナナ！　失礼を言うんじゃない！」
カタカゴは慌てて取りなした。
「ああ、ノスリ殿…、何てコトないんですよ。子供って思った事をそのまま口にするモノですから」
「いや、この子の為によくない！」
ナナは何だか嫌な気分がして、立ち上がった。
「ナナ、このヒトは、家来とかじゃあない。俺達にとって、カワセミとおんなじ、大切な仲間なんだ」
「人間なのに仲間なの？　僕達よりうんと劣るのに」
ナナがその濃い縁取りの目でキパッと言ったので、二人は思わず息を呑んだ。
「蒼の一族は草原を統治する一番偉大な一族なんだ。蒼の長はその中で一番偉いんだ。長様と人間とおんなじ仲間だなんて、嘘だ！　ガッカリさせないで！」
ナナは一気に喋って、反対方向から駆け出て行った。
二人は怒る気持ちも通り越して、唖然としていた。
「……蒼の狼は一体、どんな教育してんだ……」

＊＊＊

ノスリと巫女は馬具置き場を出て、駆け去る子供の後ろ姿を眺めていた。

「あ…あっちは…」

「いいんだ、巫女殿、あいつ、ちょっと、お灸が必要だ」

カタカゴは、子供時代の自分を、羽根を折りながら受け止めてくれた狼を想った。時は流れたけれど、あの方が変わる筈がない。

「少し、変…ですわ？　蒼の狼殿が、子供にああいう事を？」

胸騒ぎを感じる。

「ああ…、ツバクロが今晩帰るし、奴にもご注進だな」

「では、その後でカワセミ殿にも会わせて差し上げて下さい。そうしたら、おかしな誤解も解けますわ」

巫女は自分が言われた事より、あの子供の信じているモノが心配だった。

ナナは駆けていて、ふっ…と景色が歪んだのに気が付いた。

…もう遅かった。里の結界を出てしまった。

「…あーあ……」

里に来た時に注意された。蒼の里は、草原のまんまん中にあるが、結界で護られている。

例えば人間の騎馬が里の結界に走り込んだとしても、スルリと反対側へ抜けてしまうのだ。人間にしたら、何だか景色が飛んだな…位にしか感じない。

里の外からは、上空からでないと入れない。つまり、空飛ぶ草の馬に乗る蒼の一族しか入れない。

しかし出るのは自由。これは不本意な侵入者を追い出すのに便利なシステムなのだ。

里のメインの住居部分は柵があって結界の場所が分かるのだが、外れの牧場部分等は境目が分かりにくい。ナナはうっかりそこを越えてしまったのだ。

「サイッテ―…」

仕方がない。誰かが自分のいないのに気が付いて、探しに来てくれるのを待つしかない。

まあ、自分はツバクロ長の長子だ。里では大切な存在の筈だ。すぐ気付いて貰えるだろう。

「さっきオヤツ食べとけばよかった…」

しかし里から馬が来る気配はなかった。じっと待つ事は不安を募らせる。

「こんな丈の高い草の中にいると見付けて貰えないかな…」

少し離れた所に小高い丘がある。
「あそこにいた方が目立つよね…」
ナナは草を掻き分けてトボトボ歩いた。
丘はハイマツが絡むようにびっしり生えていたが、何とか乗り越えた。てっぺんは下生えの少ない細かい瓦礫になっていて、意外といやすかった。
上ってみると、遠くの山脈に夕陽が掛かるのが見えた。あれが沈むと真っ暗だ。
「早く来てくれないと、見つけられなくなっちゃうよ〜！」
ぶつぶつ言いながらその場にしゃがみ込んだ。
「僕を誰だと思っているんだ」

「…そうだ……お前は、何者だ……？」
不意に、声がした。
里の者が話すのと、全然違う感じ…。耳元に囁くように、背筋が凍り付く、低い低い声…。
「…だ、だ…だれ…？？」
ナナは恐怖で身体が硬直して、振り返る事が出来なかった。夕陽は沈みきり、辺りに闇が降って来る。身体の周りに、得体の知れないモノが忍び寄る気配がした。

「誰って…、お前さんと、ずっといたじゃないか…」
シュッと音がして、光が辺りを照した。ナナは眩しさに目を覆ったが、恐る恐る指の隙間から覗いてみる。
「やっと結界を出てくれた。これでお前さんとこうして話が出来るが…。山を降りてからずっと一緒にいたんだぜ。気が付かなかったか？」
目の前の空中に浮かぶのは、炎をまとった、赤い大きな獣だった。
「俺様はお前さんの野心と欲に興味があるのさ」
「……!! は……わ……!!……」
ナナは腰が抜けて口もきけない。
「心配すんな、痛い事はしないしない。俺様はお前と前っから話をしてみたかったのさ。蒼の妖精どもったら、有り余る力はあるのに、基本的に欲がねえ。そんだけの知識と能力と寿命のある奴が野心を持ったら何処まで行けるか…、面白いと思わねえか？」
「オ…オモシロイ…？？」
「そうさ、俺様は面白いコトにしか興味がねえ！」
獣はいつの間にか男の子の目の前に迫っていた。銀色にギラギラ光る瞳がねめつけて、鼻先がナナの顎にぶつかりそうだ。

「俺様がチョイと助けてやりゃあ、お前さんは労せずトップに辿り着ける。後はお前次第だ。その欲望と野心をエネルギーにしてな」
「ぼ…僕…欲望なんて……」
「あるだろ！　お前さんの意識の底をチョイチョイと突ついただけで、大人も呆気に取られる傲慢さが飛び出すんだ。お前の母親が人間の中で俗っぽく過ごしすぎたんだ。その結果がお前だ！」
「母様を…侮辱するな…！」
「それが、傲慢っつーんだよ！」
暗闇を二本の閃光が走る。
「チッ……!!」
赤い獣はナナから離れて大きく後ろへ飛んだ。

ナナの前に、両手に剣を持ったノスリが飛び降りて来た。
上空に草の馬が浮かんでいて、巫女が心配そうに見下ろしている。
「ナナ！　大丈夫か？　怪我してないか?!」
「…う、うん…」
「違うだろ。何でもっと早く助けに来ねえんだ？　って、不満

が一杯で、大丈夫じゃないんだろ?!」
獣は距離を取って横に歩きながら、妖しい光を放つ銀の三白眼でねめつける。
「ぼ……僕、そんな事……」
「ナナ、耳を貸すな！　心の弱い者に付け込んで来る邪(よこしま)な獣だ！」
ノスリは子供を後ろに回しながら、獣と対峙した。
「弱いだと?!　違う！　お前は欲望を持っている分、強い！　おう、何なら今こいつ噛み砕いてやるぜ！　早速、長の席が一個開くって運びだぁ！」
「吠えるな!!　邪獣が!!」
「や、やめ…やめて……」
「自分の本当の気持ちにィ～～正直に～なれよォ～～～」
トン……
獣の鼻先に何か当たった。
巫女がいつの間にか馬から飛び降り、風に乗って、狼の真ん前に浮かんでいたのだ。
「に、人間……だよね？　あのヒト…？」
「ああ、だけれど、蒼の巫女殿だ」
巫女の突き出した手で鼻先を掴まれた獣は後退りして、今までとは違う困惑顔をした。
「お、お前かよォ。相変わらず気配の読めねえ奴だなっ」
「トルイ皇子様の次は、ナナですか？　どれだけ蒼の狼さんにチョッカイ出したいんです?」
＊＊＊
「・・・??????・・」
ナナは目を丸くする。
ノスリもちょっと止まった。
「蒼の狼さんを困らせたいだけなんでしょ」
「う…うるせぇ…!!」
「貴方らしくないですよ」
「うるせぇ…！　うるせぇ!!　ヒトが…気持ちよく暮らしてる所にドカドカ踏み込んで来やがって！　折角、居心地よかったのによォ。あいつ、何回、俺様の居場所を侵略したら気が済むんだ!!」
「……」
「……」
地上の二人は口を開けてポカンとしている。
カタカゴはペコリと頭を下げた。

「その点は私が謝ります。本当にお気の毒でした。謝りますからもう絡まないで下さい」
「……」
獣はじっ…と、巫女の目を見据える。
「駄目だな…」
「……」
「このガキは、もう半分、俺様と契約を結んだようなもんだ。今更手放せるかよぉ。俺様の思い通りにならないんなら、噛み砕くまでだぁ!!」
「獣が!!」
ノスリが二刀を握り直した。しかし何故か獣とノスリの間に巫女が入った。
「み、巫女殿?!」
ノスリがつんのめった隙に、獣は大きく跳んでナナに飛び掛かった。慌てて立ち向かおうとするノスリの右腕に、今度は巫女が飛び付いてぶら下がった。
「み、巫女殿?! よもや、操術に?!」
「掛かってなんかいません。よく見て下さい!」
獣の爪がナナに届く直前、ナナの背中から何かが飛び出した。ノスリの腕程も太さのある、眼のない、長い蛇みたいな蟲?!
「ほれ、行ったぞ!」
蟲はピョンと跳ねて、ノスリの方に飛んだ。獣は、蟲を追い出しただけで、手出しをする気はないみたいだ。
「こいつ?!」
ノスリが小刀で蟲を薙ぎ払おうとしたが、実体がないかのように、ツルリと通り抜けてしまった。
蟲は方向を変えて巫女に飛び掛かる。避けられない程早くもないのに、巫女はやすやすと蟲に巻き付かれ、地面に転がされてしまった。
「み、巫女殿…!」
「…ノスリ殿、手を出さないで…」
足と銅を絞められてちょっと顔を歪めながら、巫女は子供の方を向いた。
「ナナ…!」
ナナは腰を抜かして、歯をガチガチ言わせている。
「この蟲を退治出来るのは貴方だけなの。これを育てたのは貴方なんだから」
「わかんない、そんなの、わかんないよ!!」
「この蟲は私を絞め殺すわよ」

「・・・嘘・・」
「貴方の心の中に、他人を粗末にする気持ちがあるから」
蟲の胴体がズルズル動いて、本当に巫女の首に伸びて行く。
「巫女殿！」
駆け寄ろうとするノスリの前には、獣が立ち塞がった。
「手を出すなって言われたろ、どの道、お前さんには触れない」
「し、しかし……」

巫女の身体が反って、もう、口から声を出せなくなった。ナナを見つめる黒い瞳の光が薄くなって行く。
ナナは頭が真っ白になった。
「うわあああああ――――!!」
必死で足を動かして蟲に飛び掛かった。巻き付いている胴を掴んで引き離そうとするが、子供の力じゃビクともしない。
「た、助けて…、ノスリ長様、どうしたらいいの?! このヒト死んじゃう、ああ！」
焦る子供の手首に、冷たい指が触れた。巫女が力を振り絞って腕を伸ばしているのだが、子供の眼前には別の物が広がった。水色の長い髪を揺らして、振り向く男性の顔…? その薄い唇が静かに唱える。

――――――破邪――――――・・

気が付くと、蟲は真っ黒に干からびて、動かなくなっていた。ノスリが巫女を助け起こし、ナナは尻餅を付いて茫然としている。
「誰? 今のヒト…?」
「うん、俺には見えなかったが…、巫女殿?」
巫女は青い顔をしていたが、自分で起き上がりながら答えた。
「カワセミ殿に術を預かって来ました。上手く使えてよかったです」
「な、なんだよ！ そんな奥の手があったんなら、さっさと使えばよかったじゃない！」
涙目でふて腐れる子供に、巫女はゆっくり言った。
「ううん、違うのよ。言ったでしょう、貴方でないと退治出来ないって。貴方が本当は何が大切かを分かろうとしたから、カワセミ様の術は力を持ったの。貴方が頑ななままだったら、いくら術があってもそれを受け取る事は出来なかった」
「……??」
「すぐに分からなくてもいいのよ。貴方がこれから蒼の里で学んで行くのは、そういう事なのよ。石版に書かれたお勉強だけ

じゃなくって」
「……」
「癇の…蟲…か？」
ノスリが獣に声を掛けた。
「ああ、下等な奴だ。どうもこのガキ、なんか匂った。案の定こんなのを育ててやがった。どっか澱んだ気の溜まる場所に、一人で長くいたな？」
獣は苦々しい顔をして子供を睨んだ。
「どチビがっ！　物事の表っ側だけしか見ていないから、あんなのに憑かれるんだ！　俺様の獲物の癖に、レベル低すぎなんだよ！」
「おう、…あんた？　ナナを、助けてくれたんじゃないのか？」
ノスリが怪訝そうに尋ねる。
「助ける?!　誰が?!　俺様の獲物を確保しただけ…！」
とまで毒付いた所で、また巫女にポンと鼻先を掴まれた。獣は慌てて跳び退る。
「だから、それは、ヤメロ!!」
「ナナを見逃して下さい…」
巫女は上目遣いに獣を見た。
「嫌だね。最っ高の玩具だ」
「……」
「何だよ……」
「……お願いしちゃいますよ…」
「それはよせ!!」
赤い獣は慌てて宙に跳んで踵を返した。
「へ…しょうがねぇな。お前がいるとやる気が失せる」
獣は舌打ちして、去り際、もう一度ナナを見据えた。
「気が変わったらいつでも呼びな。俺様は常にお前さんの隣にいる！」
捨て台詞と共に空を駆け上がり、シュッと空中に消えた。
巫女はその残像を見つめながら、口の中で小さく何か呟いた。
「巫女殿、知り合いですか？」
ノスリがナナの肩を抱きながら尋ねた。
「山の神殿に昔、トルイ皇子様と行った時、出逢いました。蒼の狼殿が来て、場所を明け渡さざるを得なかったようで。そんなに悪いヒトではありませんが…」
巫女はナナに正面向いてゆっくり言った。
「ヒトの心の邪(よこしま)に入り込んで、破滅させる力は、十

分に持っています」
ナナは俯(うつむ)いておどおどしている。何だか凄いヒトを、人間なのにって馬鹿にしちゃった。自分の頭の表面だけで…。
カタカゴはそんなナナをそっと見やって、ノスリに頼んだ。
「まずはナナを連れ帰ってあげて下さい。怖い思いをして、へとへとでしょうから」
「あ、ああ、そうだな…」
ノスリは馬を降ろしてナナを乗せる。
「巫女殿……ごゆるりと…」
巫女はノスリに軽く頭を下げた。

上空に飛び立って、振り返ると、巫女は屈み込んで地面の二つ積まれた玉石を撫でていた。
「ノスリ長様…あの…」
「説教のタネはいろいろある。だがその前に、一番にやるべき事を考えるんだ」
「えっと、巫女…様に、謝る…。あと、お礼を言う…。ノスリ長様にも…」
「そうだ、偉いぞ」
「僕…偉くない…」
「あの獣の甘言に乗らなかった。巫女殿を助けようとした。一番に巫女殿に謝る事に思い至った。そういうのを偉いって言うんだ」
「…はい…」

心配して待っていたフィフィにナナを預けて、ノスリはわざとゆっくりハイマツの丘へ巫女を迎えに行った。
カワセミの依り代となって四十余年…、巫女が里を出たのは初めてだ。目鼻の先にある母の墓にすら、今日初めて行った。
カワセミが、ナナの迎えに巫女も行くように指示したのは彼の計らいかと思ったが、まさか術を渡していたとは。彼女がいなければ、ナナを本当に救うのは、容易ではなかったろう。
術を預かるなんて、執務室の弟子だってそうそう出来ない。さすが、長年カワセミの依り代を務めているだけはある。まったくあの巫女殿は…底が知れない…。
ナナは馬繋ぎ場で待っていて、巫女に低頭謝った。そうしてノスリ家の姉達にごちゃごちゃ弄くられながら家路に着いた。

夜半遅くにツバクロが帰還した。
手紙で概(おおむ)ねは伝わっていて、執務室より先にカワセ

ミのパオに直行し、カタカゴの手を取って礼を述べた。明日、ナナをカワセミに紹介する約束をした。
　執務室に戻り、ノスリはナナの心配を告げた。癇の蟲が憑いていたせいだとしても、ナナにつけ込まれる部分あったのは、蒼の狼の教育に一端があるんじゃないか?と思ったからだ。
「なあ、ノスリ…」
　ツバクロが一拍置く。
「蒼の狼は、里ではほんの子供時代しか過ごしていないんだ。しかも前の前の偉大過ぎる長の時代だ」
「あ、ああ……」
「僕達とはちょっとズレているんだろうね。でもねえ…実は僕はその点はあまり心配していない」
「そうなのか?」
「キビタキを思い出してごらん」
「あ…ああ、狼殿、奴に対して、めちゃめちゃ厳しかったな…。昔の里の教育はあんなんだったんかな?」
「んー…、彼女の里に対する想いもあったろうけれど…。キビタキ、蒼の長の弟子ってだけで、僕達に、過分にイメージを膨らませていたろ」
「ああ…」
「でも、言えば素直に分かってくれた。そして、根っこの所は本当に…」
「真っ直ぐで、優しくていい奴だった!!」
　ノスリの目に、なつっこく慕ってきた、赤毛の子供が映った。
「ねえ、僕が、就学年までは狼の元で育てる事にしたのは、だからなんだよ。あのヒト、無茶苦茶なようで、根っこの部分をキチンと育める…って思ったんだ」
　自分の心の澱(よどみ)に喰われかけたナナ…。
　根っこがちゃんとあったから、赤い獣の甘言も拒絶出来たし、蟲も祓えたのだ。
「ただ、長の事…だ。長って存在を他人事にしか見ていないユユと違って、あいつ、親が思う以上に、長を継ぐってリアルに感じていたんだ。プレッシャーが歪みになってしまった」
「その歪みに蟲が楔のように入り込んだ」
「ナナがもうその気なら、ちゃんと道筋を示してやらなきゃ。それは僕の役目。・・にしても、早いよな。もう、そんな事、考えてマスか…」
「俺達が弟子入りを決心したのも、この歳だったぞ」
「ああ…、そうだな」
　二人は遠い目をして笑った。

そういえば、自分達が長というものを解って来たのも、弟子入りして何年か経ってからだった…。

風出流山(かぜいずるやま)。

針のような山々に蒼い月が掛かり、雪原に蒼い影を落とす。立つヒトは一人なのに、影は二本あった。

「…本当に久し振り……」

「……」

「ナナに着いて行ってくれたんですね…」

「……」

「あの子、ちょっと、一途が過ぎるから、心配だったんです」

「……」

「…お礼は、言われたくないんでしたよね…」

「……」

＊＊＊

蒼の里の南側の端、鍛冶場や装蹄場の奥が、広い放牧場になっている。放牧地をぐるりと囲むような土手一面が、今は黄色い花の絨毯だ。

小さな花が集まって丸いぼんぼりみたいになっているこの花は、花なんかに縁のないノスリが、唯一気に入っている特別な花だ。

「わああ！　きれい！　わあぁ!!　お馬が一杯!!」

ユユは感激一杯の声を上げて、土手を駆け降りて行った。

「お前さんは、あんまりはしゃがないんだな」

ノスリは隣を歩くナナに言った。

「あ…いえ、きれいだと思うし、はしゃぎたいけれど…、僕がそう思っている間に、先に妹が叫んで駆け出しちゃうんだ」

「それでお前さんは、転んだ妹を助け起こしたり、妹が失礼をしでかした相手に謝って回ったりの役回りになっちまうんだ」

「…はい……」

ノスリはナナをひょいと抱え上げて肩車をした。

「わっ…あの、い、いいですよぉ…」

「たまには肩車されてもいいだろ、お前さんも」

「……」

「俺も大家族の長兄だったからな。気が付いたら弟や妹の世話の役回りだった」

「……」

「お前さん、うちでは一番末っ子になったんだ。もっと甘えてみろ。甘えられる子供の時期なんて、あっと言う間だぞ」

「……うん」

それに、頑張り過ぎていると、本当に大切なモノがすり抜けても気付かなくなってしまう。もう少し大きくなったら、そんな話もしてやろう…。

ノスリはナナを肩車したまま土手を登った。土手の向こう側、里と草原の結界の境目まで、黄色い花の群落は広がっていた。

「ツバクロが大陸から持って帰って来た花だ。数粒の種が、最初の年は二株育った。寒い年とか全滅しそうになったりしたが、生き残った奴が強い遺伝子を伝えながら、数十年かけてここまで増えた。多分、元の大陸の森にあった奴と、もう別物だ。『ここだけの花』だ」

「…凄い…や…」

「ツバクロが、これを一番見せてやりたかった奴には、ついに見せられなかった。二番目に見せてあげたかったヒトは……ここに来られない…。だから、お前さんら、見てくれるか?」

「僕達で、いいの?」

「…ああ、いいんだ……」

ユユが花冠を被って駆け戻って来る。

肩車を降りた兄に、もう一つの花冠を、無理矢理被せる。

焦ったりつまづいたりして来たが、日々を重ねてこうして幸福な風景を見ている。

この幸せな地平が、未来(さき)まで続いてくれればいい。

〜おしまい〜

二〇〇九・一〇・某